

Ⅲ章 各教科の取り組み

国語科

1 育成したい「思考力」

- a 論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
- b 想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで創造する力
- c 言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a 「論理的思考力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を熟考・評価することである。例えば「もうどう犬の訓練」（東京書籍3年下）では、「『いっしょに町を歩く練習をします。』と，1か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。」「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，自分の経験と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

○ ことばとことばの関係において

文のねじれ，順序，主張と根拠の整合性等，語や文，構造の整合性について熟考・評価することである。形式論理（帰納論理，演繹論理）は，このレベルの思考に含まれる。

○ ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について熟考・評価することである。「森林のおくりもの」（東京書籍5年下）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することが，このレベルでの思考である。

b 「想像力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を経験とつなぎながら読み取ることである。「かさこじぞう」（東京書籍2年下）に「じいさまは，ぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらかりうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

○ ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を讀んだり，文脈とことばの関係を捉えたりすることである。「注文の多い料理店」（東京書籍5年下）には，「金文字→水色の戸→黄色な字→赤い字→黒い戸」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を考えたり，紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのもこの思考である。

○ ことばとその使用者において

ことばを根拠に，物語の主題や，書き手・話し手の意図等をつかみ，自分の考えをつくり上げていくことである。

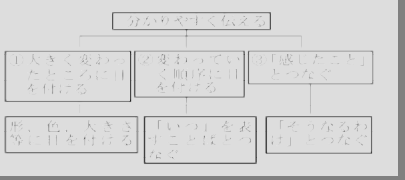
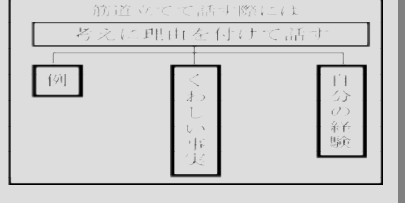
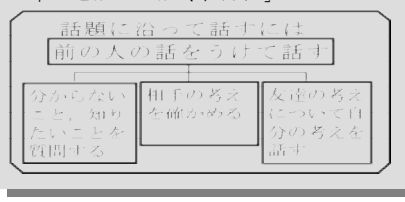
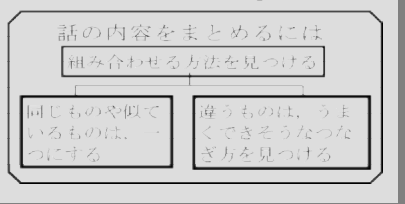
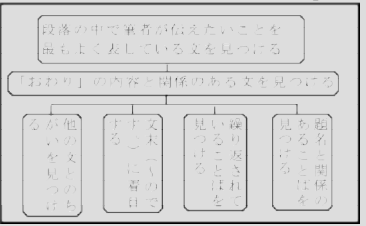
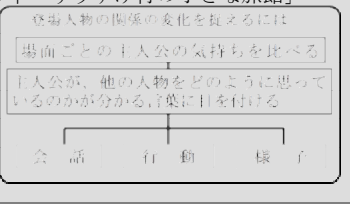
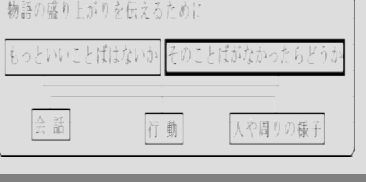
c 「言語感覚」とは

○ 正誤…… 語の使い方や文の組み立て方について，言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○ 適否…… 物事を適切に言い表しているか，場や相手にふさわしい表現か等，表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○ 美醜等… 美しい・汚い，明るい・暗い，固い・柔らかい，重い・軽い等，あるいは軽快，重厚，優美，勇壮等，表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

2 「思考力」を育成するための思考様式

「話すこと・聞くこと」	「書くこと」	「読むこと」
<p>【話題設定や取材】</p> <p>1年「どうぶつのはな」 自分が一番おもしろいと思った部分を選ぶ</p> <p>【話すこと】</p> <p>1年「きいてきいて」 詳しく話す際、「似たものと比べて言う」「理由を言う」</p> <p>2年「教えてあげる、たからもの」 絵と話す内容が合っているかを考える</p> <p>2年「まよい犬をさがせ」 物事を説明する際には、全体から部分への順で行う</p> <p>2年「たんぼぼ」「たんぼぼのちえ」</p>  <p>3年「もうどう犬の訓練」</p>  <p>5年「自分の考えを伝えるスピーチをしよう」 主張の理由→反論の組み立てにする</p> <p>【聞くこと】</p> <p>2年「せかいのかくれんぼ」</p>  <p>【話し合うこと】</p> <p>2年「せかいのかくれんぼ」</p> 	<p>【課題設定や取材】</p> <p>6年「言葉の意味を追って」 主張に合った根拠を挙げる</p> <p>【構成】</p> <p>3年「出来事をつたえよう」 いつ・どこで・だれが・どんなといったことを落とさずに書く</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 問いの段落・答えの段落を構成する</p> <p>【記述】</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 話題提示の部分を、読み手を引きつけるように書く</p> <p>6年「言葉の意味を追って」 ・根拠はまとめて挙げていく ・根拠は、順番に挙げていく</p> <p>【推敲】</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 読む相手が分かることばを使って書く</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 説明にあった絵を考える</p>	<p>【説明的な文章の解釈】</p> <p>1年「どうぶつのはな」 写真とつないで考える</p> <p>3年「自然のかくし絵」 中心文を見付ける際には4つの関係から見ればよい <同じ関係> 中心文はまとめている方「このように」 <反対の関係> 中心文は後ろの方「しかし」「ところが」 <わけの関係> 中心文は意見の方「だから」 <別の関係> 中心文は両方「そして」「それに」</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」</p>  <p>【文学的な文章の解釈】</p> <p>1年「サラダでげんき」 どんな場面か考える時には「だれが」「どうしたのか」を見つける</p> <p>1年「はるのゆきだるま」 想像したことをことばとつなぐ</p> <p>2年「かさこじぞう」 これまでの様子や気持ちと重ねて想像する</p> <p>3年「木かげにごろり」 前後の場面で状況を変化させていることばに着目する</p> <p>3年「サーカスのライオン」 始まりの場面と比べて、中心人物の行動や気持ちが大きく変わる場面を見つける</p> <p>3年「ゆうすげ村の小さな旅館」</p>  <p>4年「夏のわすれもの」</p>  <p>5年「注文の多い料理店」 (主題読みのために) 始めと終わりの人物の変化やその原因を図で表す</p> <p>5年「注文の多い料理店」 オノマトペ、色彩語から人物像を想像する</p>

※ これらの思考様式は、実践の一部であり、全てを掲載しているものではありません。

3 国語科における言語活動

(1) 個の「実感・納得」を促す体験の言語化

国語科における体験とは、学習指導要領に示されている言語活動例などをさす。そこでは、ことばの価値に気付かせていくことが大切である。例えば低学年では、叙述に即して動作化したり描画したりするなどの体験により、叙述と自らの経験とをつなげ、叙述にあることばの意味を深めることができる。自分の思いを表すことができることばの発見が、ことばの価値に気付かせることにつながるのである。さらに学年が進むと、比べ読みなどの体験を通して表現の型に気付かせたり、そのことばならではのよさに気付かせたりする。このように、思考様式を習得・活用しながら、ことばの価値を捉える体験を通して、「実感・納得」が促されるのである。

① 問題や状況を簡略化したり、問題点を焦点化したりする教材

第5学年『注文の多い料理店』の主題を捉える学習の事例である。主題を捉えるための思考様式を子どもたちが習得していない場合、既習の『大きなかぶ』を典型として用いる。この教材は内容が簡単であり、「始め」と「終わり」の変化を手がかりにして主題が捉えやすい。「かぶがぬけたのは、多くの人の協力があったからだ。」「ねずみが最後に手伝ったからだ。」など、自分なりに変化の原因を探ろうとする思考が働くのである。

このように問題や状況を簡略化した教材を用いることで、「主題を捉える際には、始めと終わりの人物の変化やその原因に着目すればよい」という思考様式の創出を促すのである。

② 思考のプロセスを自ずと振り返る教材

第1学年『はるのゆきだるま』実践の例を挙げる。この物語の最後は「どうぶつたちは、だまったまいつまでも、その花のゆきだるまを見つめていました」としめくくられ、ここに動物たちの気持ちを表す叙述はない。そこで、一人一人が文章から思い浮かぶ様子を絵に描くという活動を取り入れる。子どもたちは、人物の表情や周りの様子など様々に描く。その絵を友達の描いたものや教科書の挿絵と比べることにより、ちがいを見つけ、それがどのことばから生まれたものかを考えさせていく。そうすることで、「ことばを基に様子や気持ちを想像する」という思考様式の「実感・納得」が促されるのである。

(2) 集団での「承認・合意」を促す集団吟味

① 似た反応を板書上でまとめ、思考様式を位置付ける

第4学年『ヤドカリとイソギンチャク』実践の例を挙げる。「ヤドカリが触れてもイソギンチャクのはりはとびださない(当該段落の中心文)」ことを説明している教科書の叙述を吟味する学習を行った。子どもたちは、教科書の説明に「納得する」という立場と「納得しない」という立場に分かれ、それぞれの考えを表出した。それらを板書上に対立させて示し、「納得する」立場からは「中心文をくわしく説明しているから」という理由を導いた。また、「納得しない」立場の意見を「中心文の理由が知りたいから」とまとめた。

このように対立構造を板書上に示すことにより、「中心文と他の文の関係を吟味する」という思考様式のよさの「承認・合意」を図りながら、話し合いを進めることができたのである。

② 結論と思考様式とを板書上で結び付ける

第3学年において、警察犬をめざしてがんばる地元の訓練犬に応援メッセージをおくる学習の事例である。子どもたちは、これまでの調べ学習を基に応援メッセージに込めたい思いを多様に発表した。それらを類別して板書に示すことで、まとまりごとにラベリングをしようとする意識につなぐ。そこから応援する気持ちを伝えるために筋道立てて話すには、「例を挙げたり、詳しく説明したり、自分の経験を踏まえたりするとよい」という思考様式が表出された。それらを板書上に位置付け、自分たちの用いた思考様式のよさを「承認・合意」することにつないでいった。

